

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトI(教員・学生参加型) 2023年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	コミュニティ政策学科・3年	川田雅乙
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ政策学科	藤井敦史
研究課題	埼玉県小川町が持つ地域経済とコミュニティのあり方	
研究年度	2023年度	
プロジェクト 分担者	川田雅己、稲村日鞠、熊谷菜々子、津江菜々美、西原なつみ、ベジェロン真依楓、宮良あまね、宮川千佳	

プロジェクトの内容及び成果の概要

今回のプロジェクトにおいて3件のヒアリングおよび見学を行なった。
本プロジェクトの内容および成果の概要について記載する。

【小川まちやど】

●概要

「小川まちやど」とは、小川町全体を一つの宿ととらえて宿泊者を迎える、新しいスタイルの宿である。客室は町の建物をリノベーションしており、すべて素泊まりとなっている。素泊まりとすることで、宿泊者に地元の飲食店や温泉など、町全体を楽しんでもらおうとするねらいがある。宿は3種類に分かれており、滞在方法や日数、人数によって選ぶことができる。その中でも私達は街道沿いにある、広々とした古民家である「ツキ」という宿でオーナーの高橋さんに宿を設立するまでの経緯や今後の展望等のお話を伺った。

●宿設立まで

小川まちやどの宿泊は、通常の宿の形とは大きく異なっている。このような宿泊スタイルを取っている背景には、高橋さんの大学時代の経験がもとになっていた。高橋さんは大学時代、熱海のある宿に長期インターンシップへ参加していた。その宿が、まさに現在の小川まちやどとなる、「まちやど」という考えを取り入れたものであったという。そこでは、宿泊者に熱海というまち全体を宿ととらえて好きになってもらうために、宿オリジナルのマップを作成したり、等の希望に応じて観光先を提案したりといった取り組みを行っていた。

このような熱海でのまちやどの経験があったが、高橋さんが当初小川町を訪れた目的は、宿を設立することではなかった。元々は有機農薬をするために小川町に越してきたのだが、小川町が観光地としての魅力的な要素が様々あるにも関わらず、宿が全くないことを疑問に感じたそうだ。そして高橋さん自身が、経験したまちやどという考えのもと「小川まちやど」を作ることになったのだという。実際に小川まちやどは素泊まりであるため、食事一つを取るにあたって小川町のあらゆる場所や店等を知ることができる。このように、宿泊者がまちやどを通じて地域全体と繋がる仕組みを作っていると言える。

●まちやどとしての小川町で—課題と今後の展望

上記でも述べたように、小川町はまちとしての魅力的な要素は多くある。しかし、観光地としてまだ確立していないため、宿泊者が自発的に観光地を探すのが難しいことに課題がある。加えて、近年小川町では新事業を始めるために移住する若者が多いという。

これらのことから、今後小川町は移住者などの新しい動きをどのように取り入れるかが、まちやどとして成立させるため重要だと言える。高橋さんは、小川町は移住者の存在を排除しない、新しい風を受け入れる特徴があると話されていた。加えて、小川町を取り巻く関係人口も多いと感じているという。そのため、現時点で存在する様々な資源や個別の要素の繋がりをいかに形成することが重要であると言える。

●小川まちやどから学んだこと

このような小川まちやどのヒアリングを通して、コミュニティ形成にあたっては地域に居住する人々の動きや特徴、時代の変化を考慮することが重要だと学ぶことができた。「地域全体を一つの宿と捉える」というまちやどのあり方は、今後の地域に根付いた観光やコミュニティ作りにおいて重要な考えであると言えるが、実現は容易ではない。その地域に特有の人・資源等の特徴を踏まえながら、それらの繋がりをいかに生み出していくかが大切である。高橋さんは、小川町では新しい移住者を受け入れる風土があると話されていたが、コミュニティ形成においてはそこに属する新旧の構成員の関係性も考慮する必要があると改めて気づくことが出来た。

【下里学校】

●概要

「下里学校」とは平成 23 年に地域内の少子化が原因となり、廃校となった小川小学校の校舎を地域交流の場として活用している NPO 法人である。その代表者である小田氏に活動内容や日本の有機農業の重要性などについてお話を伺った。

(1)旧下町分校の活用

平成 25 年から旧下里分校を管理している。校舎の老朽化や法律の規制によって不特定多数の規模のイベントは不可能だが、映画のロケやアニメのモデルとなっていたこともあり、アニメファンがボランティアとして管理を手伝い、維持が可能になっている。しかし、地域の人やファンなどのボランティアだけでは、10 年後までの管理は不可能であると課題がある。また、校舎の用務員棟を「カフェ&移住サポートセンター」として活用している。小学校の給食を想起させるようなプレートにこだわりの地元野菜を使用したカフェメニューを楽しむことができる。

●課題・発見

校舎の管理、運営は地域住民やアニメファンのボランティアによって賄われており、現時点では、維持が可能だが、十年後など長いスパンでは維持が不可能である。この課題解決のためには、もちろん財政支援や専門人材の確保なども重要であるが、地域社会との連帯も重要であることが分かった。

(2)しもさと有機野菜塾

埼玉県小川町は有機農業発祥の地として知られている。1971 年から有機農業を始めた金子さんから始まり、今では集落全体が有機農業を行っている。日本では優位農業が行われているのは日本全体の約 0.5%程、政府は 2050 年までに 25%までにあげると目標を掲げているが、その少子高齢化が進み、人口が減少しているため、目標達成はかなり難しいとおっしゃっていた。この有機農業を続けていくため、金子氏とその研修生と有機農業を通して土づくりや野菜づくりなどを学ぶことができる。

●課題・発見

有機農業の重要が低い

有機農業では化学肥料や農薬を使用しないため、地球環境保護や循環型持続性に貢献しているが、生産性の低さ、膨大な労働力の必要性、高コストなどの問題により、有機農業の拡大は困難である。よって、有機農業に対する政策支援、教育の充実だけでなく消費者の意識向上や市場拡大も重要な要素である。

【UECHU】

●概要

「UECHU」は廃校になった旧上野大中学校をリノベーションし、創業支援に特化したコワーキング整備と地

域の枠組みを超えた企業間連携の場となるサテライトオフィスを併設した小川町の施設である。施設内を見学すると、学校らしき雰囲気を感じながら、至る所が綺麗に改装されていた。施設内にはフリーランスの方や、スタートアップ企業などが入っている。その企業間や人々の間で新しいアイデアが生まれ、共同してその商品開発に至ることもあるそうである。施設内には広々と設備が整ったキッチンもあり、そこでは、子ども食堂や料理教室などが開催され、そこで作られたものは定期的に販売し、地域間での交流を作っている。校長室や委員会室などは企業のミーティング室として機能し、自習室は塾の個別教室のように広々とした机で勉強できる環境が作られていた。

●課題・発見

旧校舎をリノベーションし、サテライトオフィスとして活用しているが、地域訴求性が低いと考える。近隣住民がどれほどその施設を認知していないため、施設を利用する機会やイベントに参加する機会が少ないといえる。この地域訴求性の改善が重要な要素であるといえる。

【まとめ】

以上3件の小川町におけるヒアリング及び見学を通して私達は、コミュニティ形成における多様な側面からの取り組みを学ぶことができた。小川町には、これまでの一般的な概念とは異なる宿泊施設や、多方面と連携した廃校活用事例があり、それらはどれも地域の繋がりを生み出す画期的な取り組みであると言える。このような取り組みの学習を通して私達は、コミュニティや地域の繋がり形成における様々なきっかけを知ることに加え、予期される懸念点についても考えを深めることができた。今回の学びを通して、今後の大学における学習やコミュニティ作りに活用していきたい。